

# 現地教材をいかした教科学習

## －小学部4年生社会科と2年生生活科の事例－

ブラッセル日本人学校 教諭 垣内 信子

キーワード : 教材開発・運河・マルシェ

### 1. はじめに

ブラッセル日本人学校は、ベルギー王国の首都ブラッセル市の南東に位置する生徒・児童数360人の中規模校である。教科学習では、他の在外教育施設と同様日本の教科書を使用しているが、社会科や生活科のように、地域に根ざした教材を扱うことの多い教科では、教材開発にしばしば苦勞することがある。しかし、それは、在外教育施設ならではの醍醐味でもある。本稿では、4年生社会科「郷土に伝わる願い」と2年生生活科「学区探検」の二つの単元についての教材開発について紹介したい。

ブラッセル日本人学校ではここ数年、4年生のこの単元では「運河の建設」を扱ってきている。ヨーロッパでは古くから水運は重要な交通機関であったため、オランダ・ドイツ・ベルギーなどの国々では、運河が網の目のように発達してきた。運河の重要性とその建設にたずさわった人々の願いや努力について学習する。

また、2年生の生活科では、移動店舗ともいふべき「マルシェ」(フランス語でマーケットの意)を取り上げ、地域の人々との交流をもつ活動をしている。

いずれの活動も、国際交流の窓口となっている現地採用の教師と派遣教師との連携により行われている。

### 2. 4年生社会科「郷土に伝わる願い」の教材開発例

この単元の目標は、「先人が身近な地域の人々の生活を向上させるために工夫や努力をしてきたことを理解し、そうした歴史をもつ自分たちの地域に対する誇りと愛情をもつ。」である。活動や指導の内容は、以下の通りである。

#### 1) 運河とは何か

ベルギーの地図を見ながら運河の役割を考えさせる。

運河とは、物や人を運ぶために、人工的に水を引いてつくった水路のことである。また、水路と水路の落差をつなげる手段でもある。現在のように、陸路が発達していなかった時代、運河は大変重要な役割を担っていた。多くの物を一度に運ぶことができるからである。ベルギーだけでなく、オランダやドイツ・イギリスなどでも、運河は交通手段の一つとして現在でも我々の日常生活に身近なものである。

#### 2) ベルギーの発展と運河の関係

ベルギーの地図の中に工業が発達した都市や工業発展の原動力になった石炭の産出地をかき込ませる。

ベルギー北部の海沿いには、商業都市・港湾都市、そして工業都市としても栄えていたアントワープがある。また、人口が増加しつつある首都ブラッセルは、ベルギーのほぼ中央、ブラバン台地の北に位置している。一方、南部のモンズやナミュールの付近では石炭などの鉱物資源を多く産出していた。問題は、いかにしてそれらの鉱物資源を南部から北部に運搬するかであった。ブラバン台地を貫通する運河ができれば、ブラッセルを経由してアントワープ周辺の工業都市へも石炭を供給することが容易になるのである。

#### 3) 運河の建設

どこに運河を作ればよいか考えさせる。(副読本 「わたしたちのブラッセルを使用」)

ベルギー政府は、スヘルデ川の支流センヌ川からブラバン台地を貫き、サンブロ川につながる運河を建設することを決定した。

ULB（ブラッセル自由大学）のグスタブ・ウィレンス教授が公共建設事務総長に任命され、運河建設の総責任者に就任する。すでにできていたシャルロワ運河とブラッセル運河を結ぶには、高低差 68 メートルをつながなくてはならない。当初、緩斜面を利用した水門式運河が建設される予定だったが、工事が始まり 2 年がたった 1964 年に、水の多いもろい地層にぶつかり、設計の変更を余儀なくされてしまう。

工事開始から 6 年後の 1968 年、ブラッセル市民の悲願であったロンキエール運河はついに完成を見た。ロンキエール運河は、斜面の全長が 1430 メートル。大きなローラーのついた水槽に船を乗せ、そのローラーを動かすことで船を運搬するしくみになっている。水槽は長さ 91 メートル、幅 12 メートルで、1350 トンまでの船を運ぶことが可能。水槽には直径 71 センチメートルのローラーが 236 個ついている。

#### 4) 運河見学の実際

運河見学の計画を立てさせる。（調べたいこと・質問したいことをグループで考える）

見学場所には、南部のモンズ近郊にある「ストレッピー・テュー運河」を選定。この運河は、運河建設の技術の粋を結集し、1982年から2002年まで20年の歳月を経て建設されたものである。モンズまでは、バスで約1時間の道程である。事前に質問事項を用意させておき、通訳の教師を介して質問をする。子どもたちは、この運河を訪れる前に、昔作られた小さな運河を見学。そこで係員から運河の歴史や運河を動かす仕組みについて説明を受ける。

いよいよ、ストレッピー・テュー運河に到着。遠くからでもその威容がはっきりと見て取れる巨大な建築物である。まず、内部を見学し、運河のしくみに関する映写や写真を見る。この運河もロンキエール運河と同様、南部と北部を結ぶ動脈である。巨大な水槽に船を浮かべ、高低差 73 メートルの間をそのままワイヤーを使って上下させるエレベーター式の運河である。子どもたちは、実際に船に乗り込み、運河を通行する体験をする。



#### 児童の感想より

ぼくは、最初、運河って何だろうと思っていました。話を聞いたり、実際に見に行ったりして運河の仕組みがよくわかりました。

古い運河はできてからもう100年もたっているのに、今でも使われているということでした。水の力でモーターを動かしているそうです。世界遺産に登録されている運河もあると聞きました。

新しい運河はすごく大きくてびっくりしました。ぼく達は、船に乗って船ごと運河のエレベーターでつり上げられました。一番上まで行って下を見下ろしたときは、ものすごく高かったのでびっくりしました。

### 3. 2年生生活科「町たんけん」の教材開発例

この単元の目標は、「自分たちの生活は地域の人々や様々な場所と関わっていることが分かり、それらに親しみを持ち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。」である。

ブラッセルは西ヨーロッパのほぼ中心に位置するため、多様な人々が常に出入りしている。メトロ（地下鉄）に乗ってみるとよくわかるが、同じ車両に乗っている人々がそれぞれの言語で話しており、典型的な国際都市を形成している。

また、近年では EU（欧州連合）の本部もでき、それに付随する各国の施設・学校が設置されている。面積

は関東地方くらいの小国でありながら、ベルギーは「ヨーロッパの十字路」としての地位を保持しているのである。

生活科の学習は、本校の教育課程の特色の一つである外国語教育と深く関わっている。本校では、1, 2年生はベルギーでの公用語の一つであるフランス語を必修科目とし、毎日 20 分ずつ学習している。フランス語の学習では、「あいさつ」「身近な物の名前」など、日常生活に必要な表現の学習をする。

本単元ではマルシェへの訪問を通し、地域で働く人々と親しくなるのが目的であるが、言葉の壁を取り除くことが大きな課題である。したがって、フランス語の学習と生活科の単元を関連させることが重要である。指導と活動の内容は以下の通りである。

### 1) 町の人と知り合おう

日本人学校の周辺には、本校に通う日本人家族が多く居住しているが、もちろん現地の人々も住んでいる。しかし、実際には、日本人は日本人どうしとしか付き合わないことが多く、現地の人々と触れ合う機会が少ない。クラスの子に聞いても、近所にいる子どもと遊んだことがない、どんな人が近所に住んでいるか知らないといった答えが多く返ってくる。この原因は、やはり言葉の問題に起因していることが大きいと考えられる。

今回はまず、町の大人たちと仲良くなろうということを目標にし、そのためにどんなことをすればよいかを話し合わせる。

### 2) マルシェ見学の計画を考えよう

町の人々と知り合うために、マルシェの見学を計画する。マルシェとは市場のことで、曜日ごとに決まった場所に移動式の店が開かれるものである。今回は、毎週木曜日にスブラン通りと呼ばれる大通りに立つ市場に行くことになった。肉屋・八百屋・チーズ屋など食物関係のほか衣料品店や文具店・花屋もある。

すでに家族とマルシェに行ったことがある子どもも多いが、家の人の後をついていだけで、自分の意思でマルシェに行くわけではない。そこで、マルシェの何を見たいか、何を知りたいかを話し合わせる。

また、見学をするためには、フランス語でどんな会話ができればよいのかも話し合わせる。

### 3) 見学の実際

7月、夏休み前の木曜マルシェに出かけた。途中、遊歩道を利用するが、遊歩道を降りた後、一般道を歩いたり、大通りを渡らなければならなかったりする箇所もあり、安全への意識をもたせるにはよいコースとなっている。

マルシェには、すでにいろいろな店が立っており、一つ一つの店でどのようなものがどのように並べて売られているか、店の人はどんな仕事をしているか、お客とどんなやりとりをしているかなどを見てまわり、気づいたことをメモする。また、どんなものがいくらで売られているかも調べている子がいた。学校にもどって、それを絵に描き、メモしてきたことをまとめたり、感想を書いたりする活動をした。

### 4) もっとお店の人と親しくなるために買い物をしてみよう

お店の人々と親しくなるためには、実際にお店の人とやりとりを交わさなければならないことに子どもたちは気づく。学校にもどると、「マルシェで買い物をすれば、もっとお店の人と親しくなれるのではないか。」という発言がたくさん出てきた。

マルシェで買い物をするためには、いくつかのフランス語の表現を覚えなければならない。たとえば、「いくらですか。」「この肉を 200 グラムください。」などの表現である。フランス語教師には、あらかじめ子どもたちがマルシェでどんな店に行ってどんな買い物をしたいと望んでいるかを伝え、教材として扱ってもらう。フランス語教師は、フランス語の時間に「お店やさんごっこ」などを通して、マルシェでの買い物に必要な表現を子どもたちに指導する。子どもたちは、「お店の人」と「お客さん」となって役割練

習を重ね、おうちの人から頼まれた買い物メモとお金をもらって、いよいよ出発の運びとなる。

#### 5) 買い物に挑戦

夏休み前の最後の木曜日、再びマルシェに出かけた。班ごとに分かれ、それぞれ約束の時間まで、自分の買い物をする。

八百屋では、量り売りをしている野菜や果物が多く、児童は「〇〇を△△グラムください。」ということフランス語ではっきりと告げなければならない。ふだんの買い物はほとんど近所のスーパーで済ませることが多く、このように言葉のやり取りをしながら買い物をするという体験はほとんどの子がもっていなかった。フランス語の会話能力にも差があり、達者につかえる子もいれば、転入してきたばかりでほとんどしゃべれない子もいる。まだ、うまく話せない子には、同じグループの上手な子が助けてあげたり、同行しているフランス語教師が支援したりしている。

#### 6) お気に入りのブラッセル

子どもたちは、休みともなると近隣の国や、いわゆる観光地へ出かけることが多い。しかし、本単元では、観光地よりもむしろ身近な地域に目を向けさせ、現地理解教育に結び付けさせるのがねらいである。身近にあるもののよさに気づかせたいのである。

そこで、自分の家の周りにある公園や施設について、今まで気づかなかったことがなかったか話し合わせる。

ブラッセル市内の学校は、毎週水曜日スターージュといって、学校外の課外活動をさせるために、授業を午前中までとしている。日本人学校の児童の仲にも、サッカークラブに入っていたり、スイミングスクールに通ったりしている子が少なくない。現地の子どもと身近な交流が進んでいくことで、現地への理解が一層深まるよう期待する。

#### 児童の感想より



わたしは、マルシェでかいものをしました。おかあさんからたのまれたものは、なす 2 こと、ぶどう 500 グラムでした。

わたしは、「これをください。」とフランス語でいいました。おみせの人がわたしの言ったことをわかってくれたのでうれしかったです。かいものがちゃんとできてとてもうれしかったです。

このつぎは、お母さんとマルシェに行ってみたいです。

#### 4. おわりに

これらの活動は派遣教師の力だけでは成立させることは不可能で、現地採用の教師（国際交流ディレクターの仕事も兼務）や地域の人々の協力が不可欠である。派遣教師と現地の方々との連携が大変重要であるということにつきる。

本校のフランス語教師兼国際交流ディレクターのナタリー・ヴェルテル先生は、フランス語・オランダ語（ベルギーの公用語は 3 つ、すなわちフランス語・オランダ語・ドイツ語）のみならず英語・日本語にも堪能で、派遣教師と地域の人々との橋渡し役として、いつも献身的に動いてくださっている。この場をかりて、感謝の意を表したい。